様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ７ 月 ２９ 日現在

機関番号：３４５２３
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2013～2016
課題番号：２５２８２００９

研究課題名（和文）日本、中国における聖山を象るカミ迎えの祭礼装置にみるアジアンデザインの構造比較

研究課題名（英文）Comparative Studies of Asian Design Structures As Observed in Holy-Mountain-Shaped Floats in Japan and China

研究代表者
杉浦　康平（sugiura, kohei）

神戸芸術工科大学・付置研究所・名誉教授

研究者番号：００２２６４３２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　9,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究はアジア各地に多様な造形と象徴性を展開する祭礼の山車・葬送の山車に焦点をあて、「神話的な造形手法」に主眼を置く独自の調査により研究を進めてきた。本研究によって、「山車の山とは宇宙の中心に聳え立つ須弥山（メール山）を象るもの」、「動く宇宙山は一瞬の出現、一瞬の消滅をする」、「生命樹・宇宙樹の一瞬の出現はこの世に豊穣と繁栄をもたらす」、「さまざまな霊獣が山車を飾り、山車に力をあたえる」、「動く山車が悪霊・病魔を鎮める」…などの特質を明らかにした。

研究成果の概要（英文）： In conclusion, the researchers have confirmed various characteristics of Asian floats, which include: [1] a mountain on floats represents Mt. Meru, the cosmic mountain which is believed to stand and soar in the center of the cosmos; [2] the sudden appearance and disappearance of floats represents the dynamism of the cosmic mountain; [3] the tree of life on floats brings about good harvest and prosperity; [4] various sacred animals decorate and empower floats; and [5] the power of moving floats wards off evil spirits.

研究分野：ビジュアルデザイン、アジア図像学

キーワード：山車　宇宙山（須弥山）　宇宙木（生命樹）　霊獣（ガルーダ、ナーガ）

## １．研究開始当初の背景

申請者らは、これまで２回にわたる「太鼓台は宇宙山」(2009)、「動く山―この世とあの世を結ぶもの」(2010)山車をテーマとした国内外シンポジウムや３回の中国江南地域における浙江省前童鎮、黄壇村の現地調査を行った。加えて 2011 年 7 月に國學院大學が主催した「東アジアの視点から見た曳山・山車・フロート」国際シンポジウムにも参加した。これらのシンポジウムや現地調査を通じて、日本の山車を中心とした祭礼形態は日本のみの特徴的な祭礼文化との認識を改め、中国、タイ、インドネシア、ミャンマーなどアジア東部一帯に広がる豊かな伝統文化との交流の上に花開いている具体相をあらためて知り、その造形の意味と解釈、さらに中東やヨーロッパにも広がる山車形態の共通性を持つ可能性を探った。

本研究計画は日本と中国、東南アジアの山車おける造形デザインと象徴性、及び山車を取り巻くコミュニティ構造のまだ解明されていない基礎研究を完成する。アジアの山車のこれからのあり方を展望し、山車を通した「アジアンデザインの造形語法の研究」を展開するための基盤研究を行う。

## ２．研究の目的

日本と中国、東南アジアはいずれも山岳信仰から宇宙山・宇宙樹の考え方が生まれ、宇宙山と宇宙樹を通した神と人のコミュニケーションの装置として山車が形づくられてきた。

本研究は北信濃に濃密に分布するオフネと呼ばれる舟山車、「龍頭鷁首」の舟山車を基軸に、その特異な造形、神話的背景を中国の山車、東南アジア（インドネシア、ミャンマー、タイ）の山車と比較し、日本と中国、東南アジアの山車のデザインと象徴性、及び山車を取り巻く宇宙観（宇宙山、宇宙木）の構造原理などを解明するための基盤研究を確立する。

## ３．研究の方法

研究計画では以下の研究項目を展開している。

(1)バリ島のカヨンと、ジャワのグヌンガンとの関連を調べ、アジア山車の構造原理と比較する。

(2)東南アジアの山車現れる霊獣の役割を明らかにする。

(3)仏像を運ぶ黄金の靈鳥船 ――ミャンマーのカラウェー船の造形的な特質を明らかにする。

(4)ナーガを飾るタイの「ルア・プラ・ナーム」の舟形山車の象徴性とその構造原理を明らかにする。

(5)タイの伝統文化における鳥(ガルーダ)と蛇(ナーガ)のシンボリズムを明らかにする。

(6)日本の舟山車の特徴と「フネ」との関連を調べ、とりわけ北信濃に分布する「オフネ」の歴史的な変遷と伝播の過程を明らかにする。

(7)日本に伝来していた「龍頭鷁首」の舟山車とミャンマーのカラウェー、タイの靈鳥の造形との関連を明らかにする。

## ４．研究成果

### (1)平成 25 年度

8 月にはインドネシア、シンガポールにおける「Asian Civilisations Museum」などに見られる生命樹・グヌンガンの造形研究、御輿の造形の調査を行った。

グヌンガンの調査について、本調査ではグヌンガン（山)、クカヨン（樹木）における「山」と「樹」の意味、ワヤン上演における対をなすグヌンガンのデザイン（二つのグヌンガンが並べられる)、グヌンガンにみられる表・裏の対照的な色彩使い、ダランを中心にした、左・右の人形配列、グヌンガンの構図、デザインの意味…などを明らかにした。

御輿の調査については、シンガポール「Asian Civilisations Museum」が所蔵するバリ島の「processional palanquin with naga gua radian figures」の御輿を対象に、御輿の寸法記録、御輿に見られる文様、形状、色彩記録などを実施した。11 月にはワヤン研究者である梅田英春氏とのディスカッションを行い、その結果は以下の３点成果があげられる。

①バリ島のカヨンは、ジャワのグヌンガンとはその形、図像は異なっているが、「樹木」を表現している点では共通である。

②ジャワのグヌンガンも「クカヨン」「カヨン」と呼ばれる点で共通である。

③バリ島のカヨナンにも「山」としての機能がある。

今年度は、その結果に基づいて、アジア山車の構造原理の解明作業へと繋げられた。

### (2)平成 26 年度

8 月には東北タイに伝わる独特な遷化の儀礼、高僧が亡くなった時に曳く山車の資料を調査した。調査にはソーン・シマトラン氏、Mareeya Dumrongpho 氏の指導と協力を得た。また、Lanner Tha（タイ東北部）の「山車作り」の造形調査について、山車制作者の Wat ko-Klang 僧侶からの情報を得た。

タイ僧侶の葬儀の山車の装飾や参列の規模は、身分や階級によって違ってくる。高僧の葬儀への参列は、巡礼を一回行ったことと同じ意味を持つため、多数の人々が見送りに参加する…「タイの人々は、どのようにして次の世界へ旅立つのか、死へのプロセス、その演出には極めて重要な死生観が反映している。

４月のシンガポールにおける国際シンポジウムは、中国の伝説神話における「伏羲（龍）と「女媧（竜）をめぐる葫蘆（壺)、太極（陰陽)、崑崙山（宇宙山）に焦点をあて、「聖なる山」の概念や「山と龍との関係」

の探求が、今後のアジアの山車を比較研究する際に重要な研究視点となることを提示した。

(3)平成 27 年度

9 月にはバリ島の「バデ」と呼ばれる葬儀山車。もう一つは、タイの北部、ランナータイと呼ばれる地域に伝わる葬儀山車で、ハッサディーリング鳥という聖獣を飾る、珍しい山車を取り上げて、国際シンポジウムを開催した。シンポジウムには、この世での生涯を終えた貴人・整者たちの霊魂を天上世界（宇宙山の山頂にあるとされる）へと送る葬儀山車の造形に、神話的複合獣が登場した。

「なぜこのような数多くの霊獣たちが集合し、力を尽くして、徳のある人の魂を天上界へと送り届けなければならないのか」「霊獣たちが果たす役割は何なのか」「われわれ地上に生きる一般の人々に、何を伝えようとしているのか」をシンポジウムのテーマとし、霊獣たちの姿が山車全体を支えている理由を明らかにした。

本研究の集大成の成果として、2016 年の 7 月には、「霊獣が運ぶ　アジアの山車―この世とあの世を結ぶもの」を出版した。本出版物は主にミャンマー、タイ、ラオス、バリ、日本の 5 カ国の造形性に富んだ山車に基づくものである。「霊獣が運ぶ　アジアの山車―この世とあの世を結ぶもの」の研究成果内容を下にまとめる。

**①「仏像を運ぶ黄金の靈鳥船 ――ミャンマーのカラウェー船」　ゼイヤー・ウィン**

パウントドーウー祭は、ミャンマー中東部、シャン州のインレー湖で行われる雨季明けの祭りで、太陽暦の 10 月初旬から 18 日間ほど続けられ、黄金の仏像を載せた華麗な舟山車が、曳航される。

ミャンマー、タイなどの上座部仏教のしきたりでは、人びとは新たな季節の到来を告げる雨季明けを待ち、天界での説法を終えた釈迦が下界に帰還することを祝って、灯明や供物を捧げ、盛大な祭りを行う。

祭礼の中心となるのは、舟山車巡行の行事である。湖の中央部、パウンドーウー・パゴダ寺院に祀られた 5 体の仏像(人びとが貼りつけた金箔で仏像の全体が、丸くなっている)を、巨大な鳥を飾りつけたカラウェー船上に移し、インレー湖や周辺の各村へと巡行して、功徳を施す。

人びとは数々の供え物を用意し、眼の前を通り過ぎる仏像に祈りを捧げ、日々の生活の安寧を願う。

本研究調査は、仏像巡行の主役となる「カラウェー船」に焦点をあてたもの。上座部仏教を信仰するミャンマーの人びとが産みだした、黄金の靈鳥を象る舟山車の、造形的な特質を明らかにした。

**②「豊穣を招くナーガの舟山車 ――タイのチャク・プラ祭」**
**スリヤー・ラタナクン/ホーム・プロムォン**

タイ南部では雨安居の終りに、仏像を曳き廻すチャク・プラ祭が行われる。非常に陽気で有名な祭りで華麗な舟山車の行列もあり、ルア・プラ(僧侶の舟)と呼ばれている。ルア・プラの中心部には王宮を象徴する塔「ブッサボック」が据えられ、仏像が安置される。

多くの場合、船首には壮麗なナーガ(龍)が飾られて、たがいにデザインを競いあう。船腹には花や緑の葉、金箔や銀箔、ナーガの模様 な ど が美しく飾り付けられる。華麗に装飾されたルア・プラは、特別に「ルア・プラ・ナーム」と呼ばれる。ナームは「水」を意味する。

タイのナーガは、多くの仏教説話に登場する。たとえば、仏陀が深い瞑想に入られたときに、ナーガがその脇でとぐろを巻いて頭をもたげ、激しく降る雨から仏陀をお守りしたという。ダルマの教えに感動したナーガが人間の姿へと変身し、得度して、僧になりたいと願いでた…という話もある。

チャク・プラ祭は、民衆の厚い信仰心、村人のアイデンティティーの表れであり、また、芸術的手腕を存分に発揮して、伝統文化を継承する場ともなっている。

本研究報告は、ナーガを飾る「ルア・プラ・ナームの造形的な象徴」を明らかにした。

**③「多頭のナーガが乱舞する――スラーターニーのチャク・プラ祭」　黄國賓**

タイのスラーターニーでチャク・プラ祭が始まったのは、シュリー・ヴィジャヤ王朝時代といわれ、雨季明けを祝い、行われる。「チャク」は「曳く」、「プラ」は「釈迦・仏像」を意味している。

舟形の山車は、路上で曳行されるものと、湖の上を巡行するものの 2 種類がある。路上の山車は「ノム・プラ」、水上に浮かぶ山車は「ルア・プラ」と呼ばれている。ノム・プラの多くは木で作られ、先端に華麗なナーガの装飾が施される。

路上を巡行するノム・プラの中心には、須弥山(宇宙山)を象る四角い塔屋、ブッサボックが建てられ、その中に仏像が安置される。舟の周囲には鮮やかな色布や旗、花などが飾られ、脇にはドラムや鐘が据えられ、後方は僧侶の席になる。

チャク・プラ祭の行列では、女性がバナナの葉で作られた「パーンプム」を両手で掲げ、頭上には花冠や金色の王冠を戴く。パーンプムはブッサボックと同じ意味をもち、須弥山を象徴するという。タイの文化ではパーンプムはさまざまに変形して、古代王室の王冠や儀礼に用いられる。タイ国王の玉座に添えられた天界をあらわす幡幢や、傘蓋…として飾られる。

本研究は、チャク・プラ祭における舟形山車の構造原理や、華麗なパレードの様子を、明らかにした。

**④「鳥(ガルーダ)と蛇(ナーガ)のシンボリズム―動物信仰とタイの伝統文化」**
**ソーン・シマトラン**

タイの「ナーガ」はサンスクリット語で蛇を意味し、ナーガを捕まえる「ガルーダ」鳥の姿は、よく見られるモチーフである。ヒンドゥー教の経典では、ナーガが地球上の水を飲み干し、 それをスメール山(須弥山)にかかる巨大な黒雲に変えたが、この雲はインドラ神によって粉々に砕かれ、雨となって落ちた…とされる。ナーガは水(陰)を表し、火(陽)を表すガルーダと対をなして、自然との均衡、調和を表現している。

国王が水上運行パレードに用いる平船や、御大葬の葬儀山車には、ナーガのモチーフや造形が数多く用いられている。

タイの中部や南部では、雨安居の後にチャク・プラ祭が行われる。仏像を舟に載せて川や運河を巡行したり、車をつけた山車で町中を曳き廻す。チャク・プラ祭の舟の装飾にもナーガが多用され、地上の豊作を祈願するシンボルとなる。

もう一つ、鳥を代表するものとして、ハンサ(白鳥)があげられる。ヒンドゥー教に起源をもち、ブラフマの乗りものとされるハンサは、純粋さ、創造性、智慧の象徴とされる。ラーマ１世は、水上運行パレードの平船の船首にハンサを飾り、自らの名誉の象徴とした。モーン族の仏教寺院にはハンサの柱が必ず立てられ、モーン族を象徴する霊鳥となっている。

本研究を通じて、タイの伝統文化における鳥(ガルーダ)と蛇(ナーガ)のシンボリズムを明らかにした。

**⑤「山里をゆくオフネ ――信濃の舟山車の源流」　三田村 佳子**

山車の意匠として採用された舟形は、鉾や山とともに中世から続く京都・祇園祭のなかに、その原形をみることができる。

舟山車は全国に散見できるが、集中的な分布を示す地域として信濃、特に諏訪・安曇野地方があげられる。そこでは、海のない山中にもかかわらず、祭礼にはオフネと呼ばれる舟山車が数多く担がれ曳かれる。その源流と考えられるのが、信濃の中央に位置する諏訪湖畔に祀られる諏訪大社である。

諏訪大社は独特の神社形態をもち、上社・下社の祭りで独自のオフネが登場している。8 月 1 日の「お舟祭り」には、柴を巻きつけ櫓をはいた 下社の巨大なオフネが大勢に引きずられて巡行する。一方、申・寅年の式年祭「御柱祭」の 5 月上旬の「里曳き」には、御柱を迎える上社のオフネが出る。いずれのオフネも周辺地域に伝播して大きな影響を与え、独自の様式をつくりあげていった。

本研究は、日本の舟山車の特徴を概観した後、北信濃に濃密に分布するオフネと呼ばれる様々な形態を有する舟山車を紹介し、それらを分類し、歴史的な変遷や伝播の過程をみてゆく。さらに、日本の舟山車を俯瞰し、「フネとは何か」、その意味を明らかにした。

**⑥「龍の船・鳥の船 ――浄土の夢運ぶ中国・日本の舟山車」　杉浦康平**

本研究は、ミャンマーの鳥を飾るカラウェー船の舟山車やタイの多頭の龍をあしらう舟山車に関連して、遥か場所を隔てた日本にも伝来していた「龍頭鷁首」の舟山車のことを中心に、研究を行った。

龍頭鷁首とは、船首に龍頭をあしらい、鷁首を飾る華麗なる装飾船。始まりは、奈良時代に日本に請来された「浄土曼荼羅」図。この図中に、仙境や霊界への道のりを自在に往来する力をもつ龍の姿と、強風に抗し力強く羽搏くという鷁の姿を象る二つの舟が現れ、龍と鳥、二体の霊獣の援けによって死者の魂が西方十万億土の彼方に浮かぶ極楽世界に運ばれて往生する、歓喜の情景が描かれている。中国の唐王朝で形を整えたと思われるこの装飾船は、日本の『源氏物語』や『紫式部日記』などの王朝文学でも記述され、関連して描かれた絵図にもその姿を現す。貴族たちの宴席に興を添えた一対の霊獣をあしらう舟山車は、極楽という楽土への想いを重ね、浄土にいたる願いをつのらせる。

本研究は、ミャンマーのカラウェー、タイの霊鳥の造形、霊獣・龍の造形が遥か日本へと、奈良・平安時代に到達していた。現世と来世を結ぶものとして、極楽へと死者たちの魂を運ぶものとして、日本にも伝えられていた…ということを、明らかにした。

**５．主な発表論文等**

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

**〔雑誌論文〕**（計 9 件）


① 杉浦康平『龍の船・鳥の船―浄土の夢運ぶ中国・日本の舟山車』(霊獣が運ぶ―アジアの山車）工作舎 2016、査読なし、ｐ194-221
② 杉浦康平『アジアの山車を読み解く』読売新聞 2016、文化 13 版、査読なし
③ 黄國賓『多頭のナーガが乱舞するースラーターニーのチャク・プラ祭』(霊獣が運ぶ―アジアの山車）工作舎 2016、査読なし、ｐ86-99
④ 黄國賓『絡み合う竜（蛇）・天を昇る龍―豊穣と再生を象徴する「伏羲」と「女媧」』神戸芸術工科大学アジアンデザイン研究所報告書 2014、査読なし、5 巻、2015、ｐ58-63
⑤ 今村文彦、杉浦康平、齊木崇人、松本美保子、山之内誠、黄國賓、さくまはな、長野真紀、曽和英子『アジアのデザイン文化の比較研究―山車の造形と祭礼文化を中心にして（4）―』神戸芸術工科大学紀要、査読なし、芸術工学 2015、ｐ1-4
⑥ 今村文彦、杉浦康平、齊木崇人、松本美

保子、山之内誠、黄國賓、さくまはな、曽和英子『アジアのデザイン文化の比較研究―山車の造形と祭礼文化を中心にして（3）―』神戸芸術工科大学紀要、査読なし、芸術工学 2014、ｐ1-4

⑦ 杉浦康平『「聳え立つ樹木」「山」から動く「柱」巡行する「山車」へ…』神戸芸術工科大学アジアンデザイン研究所報告書 2013、査読なし、4 巻、2014、ｐ44-53

⑧ 黄國賓『インドネシアにおける「グヌンガン」「クカヨン」』神戸芸術工科大学アジアンデザイン研究所報告書 2013、査読なし、4 巻、2014、ｐ80-83

⑨ 杉浦康平、黄國賓、今村文彦、山之内誠、さくまはな、曽和英子『アジアのデザイン文化の比較研究―山車の造形と祭礼文化を中心にして（2）―』神戸芸術工科大学紀要、査読なし、芸術工学 2013、ｐ1-4

〔学会発表〕（計 2 件）

① 黄國賓『Intertwining Dragons (Snake), Cosmic Dragons in China"Fu-xi" "Nu-wa" as symbols of fertility and renewal』、Cosmic Serpent in Asia, a symposium on the meaning of symbols as visual language2014 、 Asian Civilisations Museum (ACM)、2014.04.25、Singapore

② 黄國賓『交纏竜(蛇);昇天龍「伏羲」「女媧」…豐穰與再生』雲林科技大学 2014.6.18、台湾

〔図書〕（計 1 件）

① 杉浦康平、黄國賓、ゼイヤー・ウイン、スリヤー・ラタナクン、ソーン・シマトラン、真島建吉、三田村佳子、神野善治、ナンシー・タケヤマ、工作舎『送る舟・飾る船…アジア「舟山車」の多様性』、2016、総ページ 305

〔その他〕

ホームページ等

https://www.facebook.com/events/749206481769983/

https://kobe-du.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=150&item_no=1&page_id=13&block_id=30

https://kobe-du.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=183&item_no=1&page_id=13&block_id=30

http://www.kousakusha.co.jp/DTL/reiju.html

## ６．研究組織

(1)研究代表者

杉浦 康平（SUGIURA Kohei）
神戸芸術工科大学･付置研究所
所長･名誉教授
研究者番号：00226432

(2)研究分担者

今村 文彦（IMAMURA Fumihiko）
神戸芸術工科大学･芸術工学部･教授
研究者番号： 50213244

齊木 崇人（SAIKI Takahito）
神戸芸術工科大学　芸術工学研究科（研究院）・教授
研究者番号：90195967

黄 國賓（HUANG Kuo-Pin）
神戸芸術工科大学･芸術工学部･准教授
研究者番号： 50441382

山之内 誠（YAMANOUCHI Makoto）
神戸芸術工科大学･芸術工学部･准教授
研究者番号： 40330493

さくま はな（SAKUMA Hana）
神戸芸術工科大学･芸術工学部･助教
研究者番号： 00589202

曽和 英子（SOWA Eiko）
神戸芸術工科大学･付置研究所･研究員
研究者番号： 80537134

長野 真紀（NAGANO Maki）
神戸芸術工科大学･芸術工学研究科･助教
研究者番号： 10549679